

# ひも結びについて

奥平 志づ江

## 1. まえがき

「結ぶ」には「結わえる」、「交わる」、「固める」、「実る」、「構える」、「おわる」等、その対象によっていろいろの意味がある。また「ひも」は比喩的な意味を除けば、材質、用途等による差異は別として、通常「束ねる」または「結ぶ」のに使う細長い太い糸の意である。ここでは軟かい普通のひもを使った「ひも結び」の例を用途別に説明し、併せて、その効用について考察する。

単に束ねたり、よじったりするのではなく、ひもの末端を交錯させて結ぼうと努力する所作は知能が急速に発達する幼児期によく見られる現象であるが、「ひも結び」は、まさに知能発達の象徴的な表現であり、人類以外の動物にとっては（本能的な習性による稀少例はあるが）知能発達の限界を超える工作であると考えられる。また、それぞれの「ひも結び」には、その用途に応じて工夫した努力と叡智の結集を見るような気がして興味深いものがある。

## 2 結びの分類と要素

「結び」をその用途別に分類すると、実用的なものと装飾的のものに大別することができる。元来発想の段階では実用を目的としたものが、次第に装飾的なものへと発展したものであって、両方の機能を兼ね備えたもの、片方の機能だけにとどまっているもの、あるいは因習、流儀等と結びついて実用と装飾の何れともつかないもの等いろいろある。

事実、原始人は結びを単に物を束ね結ぶ目的のほか計数、記憶、標識の具として用いたが、また「結び」そのものに神秘性を感じ、呪咀、祈禱にも利用したといわれる。

結びの要素として通常①目（ひもの結び目）、②手（ひもの末端にあたる場所）、③体（目、手以外の部分）の三つ（図1）があげられる。実用的の結びは主として目（結びの機能部分）に、装飾的のそれは体に工夫のポイントがある。

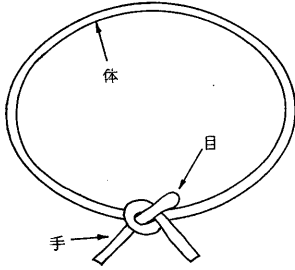


図1 結びの要素



図2 しゃか結び

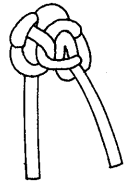


図3 とんぼがしら

### 3. 結びの例

#### (1) 留め具としての「ひも結び」

「しゃか結び」(図2)と「とんぼがしら」(図3)は、いずれも洋服のボタンのかわりに和服女物コート、女兒用被布等につける(雄ひも)に用いられる。「あげまき結び」(図4)、「胡蝶結び」(図5)、「三つ輪結び」(図6)は前記の「雄ひも」の留め輪にあたる「雌ひも」の役をなす結びである。

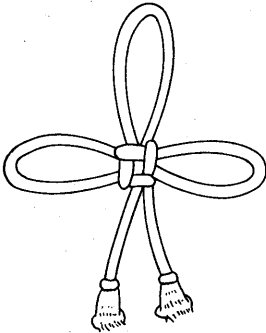


図4 あげまき結び

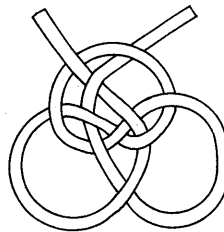


図5 胡蝶結び

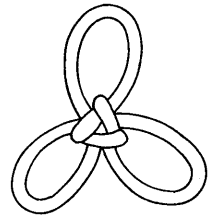


図6 三つ輪結び

#### (2) 羽織ひも結び

男物の丸打ち紐には「草の宝珠結び」(図7)と「引解きひとえ結び」(図8)女物羽織ひも結びには「ま結び」(図9), 歌舞伎衣裳に見られる羽織ひも結びには「あわび結び」(図10)が挙げられる。

#### (3) 作業結び

「男結び」(図11)は垣根を縛ったり、荷造り、俵結びなどに使われる最もありふれた「結び」である。「より込み結び」(図12)は藁縄類を縛るのに限られている。「徳利結び」(「舟子結び」ともいう)(図13)と「すごき結び」(図



図7 草の宝珠結び



図8 引解きひとえ結び

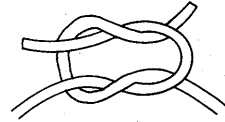


図9 ま結び

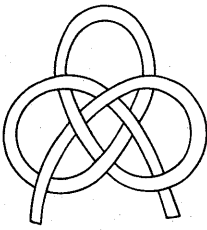


図10 あわび結び

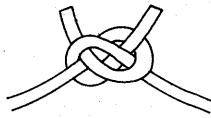


図11 男結び

14)は杭に舟，馬等をつないだり，物を下げたりする場合，簡単に手早く結べる利点がある。

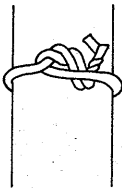


図12 より込み結び

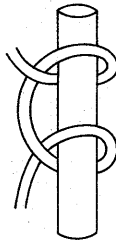


図13 舟子結び

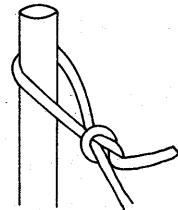


図14 すごき結び

#### (4) 捕縄結び

捕縄結びには犯人を捕える時の「早縄」，留置場においての「捕縄」，護送に用いる「本縄」等がある。身分犯罪の軽重により縄のかけ方が異なり，前記の「とんぼがしら」(図3)，「あげまき結び」(図4)，「男結び」(図11)は捕縄にも用いられる。

#### (5) つなぎ結び

ひもとひもをつなぐ場合のつなぎ結びには前記の「ま結び」(図9)，「はた結び」(図15)等が使われる。釣糸のつなぎ方には，「テグス結び」(図16)と「二重テグス結び」(図17)があり，前者は小さい魚を，後者はやや大きな魚を

釣るのに用いられる。

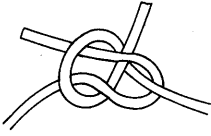


図15 はた結び

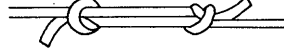


図16 テグス結び

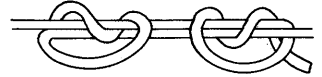


図17 二重テグス結び

(6) 飾り結び

a 軸物のひも結び等

軸物のひも結び，刀袋の緒の結び，太刀の帯取りの結び，装束のひものかけ方等は飾り結びの例である。また直垂の胸飾りに用いる「もろなわ結び」(図18)と「菊結び」(図19)，兜の後飾りに用いる「あげまき結び」(図4)，どん帳のまとめの飾りひもに用いる「菊結び」(図19)と「けまん結び」(図20)等が挙げられる。

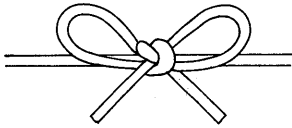


図18 もろなわ結び

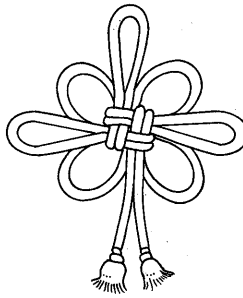


図19 菊結び

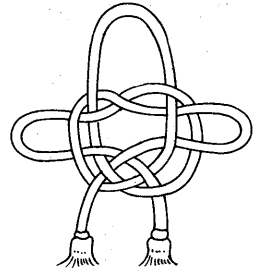


図20 けまん結び

b 茶器の結び

室町時代から茶道に伝えられてきた茶入袋(仕覆)のひも結び，茶碗を入れる仕覆の長緒の結び，箱にかけるひも結び等はいずれも結び易く解き易いことを考慮して工夫されたものである。

c 水引の結び

水引を用いて進物の上から飾り結びをする場合には，吉凶の縁起にしたがって，ひもの色と結び方を使い分ける。たとえば婚礼や全快祝などには紅と白または金と

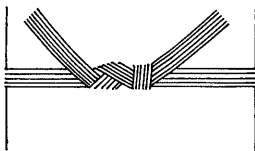


図21 結び切り

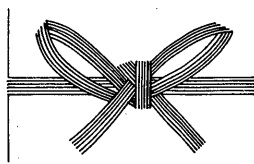


図22 蝶結び

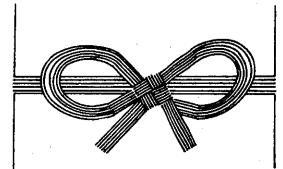


図23 石膏結び

銀，凶事には藍と白または黒と白の水引で「二度とないように」という意味の「結び切り」(図21)にする。また「蝶結び」(図22)と「石菖結び」(図23)は祝事の結びである。

#### d 吉祥結び

天台宗，日蓮宗などの法衣や五条袈裟に使われる「修多羅結び」(図24)(華蔓結びの連続)は吉祥結びの代表的例である。これは上下にいくらでもつないでゆけるので「エンドレス・ノット」ともいわれる。中国の「八結」という「結び」は三桁の方陣(縦・横・斜の合計数が同じになる数字配列)から導かれた「エンドレス・ノット」で，日本では「宝結び」(図25)といわれ，旧満州国(今の中華人民共和国の東北地方)の外交官制服の袖章(図26)もこれを用いたものである。旧日本陸軍礼装の袖章(図27)はフランスの，肩章(図28)はドイツの軍服にならった「エンドレス・ノット」である。

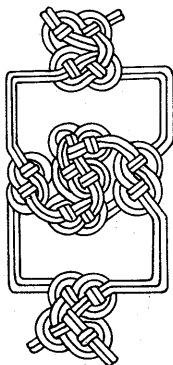


図24 修多羅結び

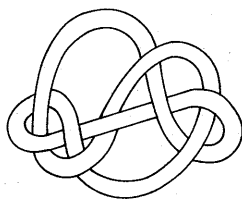


図25 宝結び

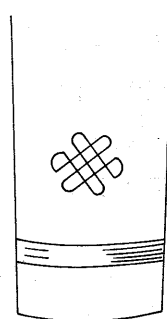


図26 旧満州国外交官制服の袖章

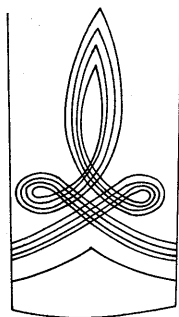


図27 旧日本陸軍礼装の袖章

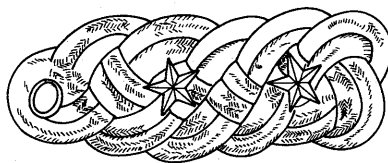


図28 旧日本陸軍の肩章

#### 4. まとめ

以上軟かい「ひも」を使った「結び」の卑近な例について述べたが，「結び」は

単純な「ま結び」を基本として、「ひも」の種類と「結び」の用途、機能に応じ、実践、工夫を積んで発展してきたものである。したがって「ひも」の種類と結びの用途、機能を合せて考えた場合、結びの例は驚く程多く、それぞれに適した結びを単独に、または巧みに組合せて日常用いていることがわかる。更に個々の結びを比較、観察すると、ひもの結び方で結んだ人の職業、性格、性別等が判別できるので、古くから犯罪捜査にも利用されている。

機械文明の発達にたがって「ひも結び」の手工の機会が子供の遊戯だけでなく、日常生活から奪われていくことを考えると、創造性と技工力（器用さ）ひいては芸術性（情操）を育成するうえで、教育の面で一段と反省を要する転機に来ているように思われる。恰も交通機関の発達とは逆に原始的な体育競技の重要性が体力育成のために一層見直されてきたことと同様に。

#### 参 考 文 献

- |          |            |       |
|----------|------------|-------|
| 1. 額田正美  | 結び         | 法政大学  |
| 2. 道明新兵衛 | ひも         | 学生舎   |
| 3. 大田臨一郎 | 被服文化（97号）  | 文化服装  |
| 4. 日野西資孝 | 日本の美術（26号） | 国立博物館 |